



元邪神って本当ですか!? 1

万能ギルド職員の業務日誌

α L P H α L I G H T

紫南
Shinan



神界での
コウヤの家族

リクトルス

戦いと死を
司る神。

ゼストラーク

創造と技巧を
司る神。

エリスリリア

愛と再生を
司る女神。

ナチ

辺境伯の元で暮らす
エルフのメイド。
邪神と何やら関係が
あるらしく……？

グラム

『おいちゃん』を
自称する冒険者。
ソロでAランクにまで
上り詰めた。

タリス

ユースールに現れた
伝説の冒険者。
コウヤの良き
後ろ盾となる。

コウヤ

辺境ユースールの
冒険者ギルドで働く、
邪神の前世を持つ少年。
今の仕事が大好き。

バックン

何でも収集する
ミミック。
神様時代のコウヤの
眷属で、偶然
再会する。

登場人物紹介

特筆事項① 査察が入りました。

「ああああ……終わつたあああつ!!」

見渡す限り、そこは緑の草原。足首までも到達しない、短く柔らかい葉をつけた草が、地面を覆っていた。そこに大の字になって転がれば、そよそよと吹き抜けていく風が心地よく体を撫でていく。

少年はしばらく目を閉じ、それを感じていたが、風に混じって届く臭いに顔をしかめた。

「……鉄くさ……」

錆びた鉄の臭い。それも仕方がない。寝転がる場所から百メートル先には、ライオンの体に蛇の尻尾、大きな猛禽類の翼を持った異様な生き物が、腹や喉を引き裂かれて死んでいるのだから。

「フツ、とつ」

勢い良く腹筋を使って体を起こし、そのまま立ち上がると、臭うそれらを遠目で確認する。

それから、腰の小さなポーチに手を入れ、スマートフォンに似た形と薄さのカードを取り出した。

指紋認証のように、端にある丸い印を摘み、魔力をほんの少量流せば、名前や年齢、種族、職業、レベルなどの情報が表示される。

名前……コウヤ

年齢……12

種族……人族？

レベル……30？

職業……ギルド職員？

魔力属性……火？、風？、水？、聖？、？？？

スキル・称号……エリスリア神の加護、？？？、？？？、隠蔽

ハテナ表記がとにかく多い。それは気にせず、少年——コウヤは、今度は丸の印から少し外れた箇所少量の魔力を流す。すると『討伐記録』が表示されるのだ。一番上にあ

るのが、たった今倒したものの記録。

「Aランク上位種。キメラ」……間違いないね」

ほっとしながらも、次いで溜め息が漏れる。本来ならば、ギルド職員であるコウヤが倒すべきものではない。

「はあ……やつちゃった……」

こんなものは戦闘職バリバリの冒険者が出張る案件だ。間違っても、今年十二歳になった少年が相手にするものではない。

「戦うの好きじゃないし、みんなが心配するからギルド職員になったのに……」

コウヤは、こんな凶暴な魔獣を糧にして生きていくような、不安定で、命の保証のない冒険者の生き方は向かないからと、あえて冒険者ギルドの職員になったのだ。それなのに、何故こんな所で一人で戦うことになっているのかと思ひ出す。

「えっと、確かこのキメラの討伐依頼を受けた人達が何度も失敗して、毎日、毎日、治療魔法使いつつことで駆り出されて……あ、そうだ。俺がキレたんだ。もういい加減にして思ってたもんね。うん。あれはしょうがない」

朝も夜も関係なく受付から引つ張り出され、叩き起こされ、食事の時間も削られた。

それなのに、ギルド職員だからと特にお礼も報酬もなし。マスターもできるならやるのがギルド職員だと言つてふんぞり返っているだけ。納得できない。お手当てくらい出して

然るべきだと流石に頭に來たのが今朝。

怪我や体の不調を治療できる治療魔法使用は大変貴重だ。

高い魔力と、繊細な魔力コントロールができないと実現しない。それ以前に、特別な神の加護がなければ発現しない魔法だった。

治療魔法使用の多くは、教会で働いている。そして、お布施としてかなり高額のお札をもらって患者を治療するのだ。ただし、そんな治療魔法使用も、どうやら年々発現率が下がっているらしく、お陰で更に治療費は高額化しているという。

「エリイ姉、金額を見て治療する人達が嫌いだって言って怒ってたし、別にお金が欲しいわけじゃないんだけど……ってことだから誤解しないでね？」

《分かってるわよ。バカね》

目を閉じて話しかけるようにすれば、頭の中に返事があった。それに笑みを浮かべて目を開けると、景色が変わる。肌を感じていた風も消えた。そこは広い洋館の一室だった。

「あ、久しぶり」

「久しぶりね。ってというか、教会に來ればいつでも会えるって言ったのに、コウヤちゃん全然来ないんだものっ」

目の前で腰に手を当ててプリプリと怒るのは、小柄で可愛い女神。愛と再生を司る神、エリスリリア。コウヤが『エリイ姉』と呼んだ相手だ。

金色の腰まで伸びた髪をゆるく三つ編みにして、淡いピンクのドレスを着ている。表情によつては十五、六歳くらいにも見えるお人形さんのような女神様。時々口煩くはなるが、優しいお姉さんだ。

そんな彼女に勧められて部屋の中央にあるテーブルにつく。そこには、上品なティーセットが用意されていた。

「だって、今教会に行ったら捕まるでしょ？」

「はっ、そうね」

治療魔法が使えることは、既に町中に知られている。そんなコウヤが行けば、教会に所属しろだのなんだのと神官達が迫ってくるだろう。

「そうになったらどうなると思う？」

下手をすれば監禁だ。最近の教会はキナ臭い。治療魔法の使い手が少なくなっているということは、それだけ神の加護が少なくなっているということ。彼らにとっては由々しき事態だ。

「消えちゃうわね」

「うん。消しちゃうね、教会。俺、今キレやすいみたいだし」

「それ、職場のストレスだと思うの」

「やっぱり？」

ちよつとそうかなと思っていたコウヤだ。

「あれをブラック企業って言うんじゃないかなって、自分でも最近気付いた。生活の安全と安定のために目を瞑^{こら}つてきたけど、そろそろ限界かも」

いくらなんでもあれはない。

「最近、休みがないんだよ。最初の頃は週に二回のお休みもあったし、契約でもそうあったんだけど、職員足りないからって休み消えたよ？ どこ行つたの、週休二日制。しかも勤務時間の半分が時間外労働じゃない？ クビになるのイヤだから黙^{だま}ってるけどね！」

今気付いた。健康にも気を使っている身としては、大変不安だ。けど、せつかく就いた職は失いたくない。すごい葛藤^{かつどう}。だから、仮に法律がしっかりしていたとしても過労死はならないのだ。

「休みがないと余裕がない。そうするとどうしてもイライラしちゃうんだよねっ。でも、働けるって素晴らしいって思っちゃった自分がいる！」

「うん。コウヤちゃんはこっちに戻って来てもポジティブだったもんね。まあ、人生の半分以上もベッドの上での生活だったんだから、そう思うのも仕方ないんだけどね」

「そう。自分で稼^{かせ}げるって素晴らしい！」

コウヤは生まれる前の生の記憶を持っている。

この世界に来る前、前世ではずっと病院のベッドの上で過^あごしていた。思うように動か

ない体は細くて、看護師さん達を見て働くということに憧^{あこが}れたものだ。

「でもね。いくら動けるようになったからって、今回のあれはないと思うの」

「今回？ 何かあったっけ？」

首を捻^{ひね}って思い返してみる。

今日は早朝、まだ日が昇らない時分に叩き起こされた。前日の深夜過ぎまで書類整理に没頭^{ぼつとう}していたので、眠^{ねむ}つたのはほんの二時間ほどだろう。大体、書類に間違いが多過ぎる。細かな表記もそうだが、今月に入ってからまだ一週間なのに経費と予算の採算^{さいさん}が既に合わないし、どこから持ってきたのか分からないお金の記録とか、逆にどっかに消えるお金とか、謎だらけだった。半分も終わらなくて、ふて寝したのが昨晚だ。

そして、起こされてから、今回のキメラを相手に怪我をしたという冒険者達の治療。瀕^{ひん}死の人も多かったが、中には『絶対これは酒に酔^よって喧嘩^{けんか}で出来た怪我だろう』というのが交^かざっていたし、眠かったのと面倒になったので、広範囲の治療魔法【エリアハイヒール】をお見舞いした。古傷や慢性疾患^{まんせいしっかん}までは治^{なお}らないので、大騒^{おおさわ}ぎにはならないはずだ。

「町全部を覆うエリアハイヒールはやり過ぎたかも？」

「うん。あれもそうだね」

あれも、ということとは、違うらしい。ならばその後、キレたやつだらうかと目を瞬^{しほ}かせる。「あれができるならもつと早くやれって言われてキレたやつ？ 冒険者全員転がしたの、

ダメだったよね。ギルド職員として」

「うん。それもちょっとダメだね。けどそれじゃないんだよ？」

これでもないならなんなのか。あとはあのキメラを倒したことしかない。

「俺にはやっぱりあれの相手は難しかったよね。倒せたのが奇跡！」

これには、コウヤの答えを聞きながら部屋に入って来た者が答える。

「うん、そうだね。奇跡だよね」

知的なメガネ男子。彼は戦いと死の神、リクトルスだ。物騒なものを司っているけれど、全くそんな感じはない。見た目以上に理性的で穏やかな神様だ。第一印象は優しい保育士さん。いつも頭を撫でてくれる彼を、コウヤは兄として慕っている。

「あ、リクト兄、こんにちは？」

「はい、こんにちは……じゃないからね!？」

何やら怒っていらつしやる。でも、きつと理不尽なやつではない。また心配をかけたのかもしれない。このお兄さんはちょっと過保護なところがある。そして、その答えがこれだった。

「だって武器がペーパーナイフってなに!? あれじゃ普通切れないよ!? 何を切るものか分かってるよね!？」

「紙でしょ? ペーパーって言うし」

「そうだね。正解! なんにんでキメラ切ってるの!？」

よしよしと頭を撫でられた後に、ガシツと頭を片手で鷲掴みにされたコウヤ。反省しなくてはならないらしい。

「あ、だから切りにくかったんだ。魔力で覆って一生懸命切れるようにしたもん。それに妙に短かったし、細くて困った」

「もつと早く気付こう? 怪我したらどうするのかな?」

「ごめんなさい」

兄の目が怖くなったきたので、しつかり、はつきり謝っておいた。

そこへ、今度は威厳のあるお父様、創造と技巧の神、ゼストラークが登場する。

「まったく……あれほど剣の打ち方もしつかり教えただろうに……」

「だって、ゼストパパの直弟子ってスキルすごいんだよ? 下で打ったら一発で、魔剣も聖剣も、神刀も妖刀もおまけに降魔剣まで作れちゃったもん」

しつかり気合いを入れて炉から自作したのがいけなかったのかもしれない。そういえば、その時に作った炉は、壊すのがもつたないからと結界を張って、人気のない森の中に放置してあるなと思ひ出すコウヤだ。

「……その剣は、どこにやった……」

それを使えば良かったのではないかとゼストラークが尋ねる。しかし、コウヤは当然の

ように、そんな選択肢は頭になかったと首を傾げてみせる。

「怖くなって亜空間に放り込んだ。どっかしい感じのダンジョンとかの最下層に封印しようかと思って。変なところに棄てたらダメなやつでしょ？」

「産業廃棄物みたいに言わないように……」

作ったのは良いけれど、棄てる場所に困るってあるよねと何度も頷く。そこで、リクトルスが肩を掴んで迫ってきた。

「待って、そんな剣が作れたってことは、炬も作っただよね？ 【神匠炬】はどうしたんだい？」

やっぱり気付くかと、コウヤは嬉しそうに笑顔で答えた。

「それね。今、俺思いつくそうとしてるからちょっと待って」

「覚えてない!？」

流石はキレ者でしっかり者のリクトルスだ。誤魔化しは通用しない。実は、コウヤは先ほどから正確な場所を思い出そうとしていたものの、まとまらない思考に困っていた。けれど最悪なことにはなっていない、と勝手に安心している。

「大丈夫！ ちゃんと結界張って不可視の魔法もかけてあるよ！」

「それは大丈夫じゃない！ エリス、搜索！」

「任せて！」



なんだか慌^{あわ}たらしい。一緒になってバタバタしては邪魔^{じゃま}になるからと、コウヤは呑^の氣^きにお茶を啜^すった。

「あ、これ美味しい」

「……コウヤ、反省は？」

ゼストラークが呆^{あき}れながら対面の席に座って、そう促^{うなが}す。

コウヤは目を瞬^{またた}かせてから口にした。

「えっと……炉の場所忘れちゃってごめんなさい。それと、ちゃんと剣で戦^{たたか}わなかったのも反省します」

「ああ……」

真^まっ直^ちぐにゼストラークを見て告^つげれば、彼は小さく頷^{うなづ}いた。ただ、まだ少し納得していない様子。眉^{みげん}間の皺^{しわ}は既に刻^きまれたものだが、普段より二本多い。ならば、今後このようなことがないようにしますと、もっとしつかり示^しさなくてはと氣^き合^あいを入^いれた。

「今度からは、炉ごと亜空間に片付けるね」

「……ん？」

ゼストラークの表情が固^かまった。しかし、それは氣^きにせずにはコウヤは思考^{しやう}に沈^{しず}む。炉はただの物ではないので、どう片付けるか考^{かん}える必要^{ひつ}が少^{すく}しあるが、できなくはないだろう。将来的には家丸^{けまる}ごと持^もっていけるかもしれない。これは一考^{いっこう}の価^か値^ちありだ。

うんうんと頷^{うなづ}いて続^つけた。

「あと、しまつてた剣を使^{つか}えば良^よかった。使^{つか}わないのもつたいないもん。あれならどれでも一太刀^{のじたち}だったよね。試^{ため}し斬^きりくらいいしないと、作^{つく}った剣に申^まし訳^{わけ}ないし？」

「ん？ うん？ 待ちなさい。今回の反省^{はんしやう}は、一人でキメラに挑^もんだことだ。それと、その剣や刀はあまり使^{つか}わないように。幾分^{いくぶん}か力を抜^ひいて打^うつたのを使^{つか}いなさい」

「はい！」

「本当は良くないがコウヤなら……なまくらを打^うつ感^{かん}覚^{かく}でいい加減に打^うつんだぞ」

「片手^{かて}間^{かん}つてやつだね。やつてみる！」

刀匠^{とうしやう}や鍛冶師^{かやし}達^{たち}に失^し礼^れだが、そうでなくては伝説級^{でんせつき}の代物^{しろもの}がポンポン出来^{でき}上が^あつてしま^まう。これは量産^{りやうさん}してはならないものだ。

そこで、神匠^{かみしやう}炉^ろの検索^{けんさく}をかけていたエリスリリアが声^{こゑ}を上げる。

「見^みつけたっ！ 場所と……地図^{ちず}これね。とりあえず、不干渉^{ふかんしやう}の結果^{けい}も張^はつておいたわ。なるべく早く処^{しょ}理^りしてちょうだいね」

「分^わかった。あれ、結構^{けつこう}近^きかったね」

エリスリリアから渡^{わた}された地図^{ちず}を確認^{かくにん}すると、コウヤが現在^{げん}住^{じゅう}んでいる町^{まち}から徒歩^{とほ}で二十分^{ふたじゅう}圏^{けん}内^{ない}だ。とはいえ、それはコウヤの徒歩^{とほ}でという注釈^{ちゅうしやく}が付^つくため、一般的^{いちぱん}には歩いて一時間^{いっしやうかん}と少しかかる。

コウヤの張った不可視の結界があったとしても、そこに何かあることは分かるので、いくら人気がなくとも、そのまま放置しておけば、異変ありと領から調査隊が派遣されてしまふところだった。

「戻ったらカメラを回収して、道すがらどうするか考える。今回のことで、やつぱり使える剣の一本くらい打っておくべきだと思ってたし、三日ぐらいでどうにかするね」

ひょいっと椅子から飛び降り、コウヤは三人に顔を向ける。

「それじゃあ、エリイ姉、リクト兄、ゼストパパ、またね」

ここは神界、長居はできない。

「ええ。寂しくなったら、いつでも会いに来なさいよ？」

「一人でなんでもやろうと思わないように」

「あまり無茶をしてはだめだぞ」

「はい」

その返事を合図にするように、コウヤは次の瞬間、カメラが転がる草原に戻っていた。

「さてと、まずは何しようかな？」

意識だけ神界に連れて行かれていたため、姿勢はそのままだ。何気なく持っていたギルドカードには、またコウヤのステータスが表示されていた。

ハテナ表記は、カードが正確に読み取れていないものだ。提示義務が生じるのは町の出

入りの時と、ギルド内。だが、ステータスは最低限、名前と年齢、種族、職業が確認できればいい。非表示設定ができるので、ハテナも消すことが可能だ。

ギルド職員になったことで、怪しいと思われる情報を非表示にできる仕掛けを知った。故意に偽ることはできないが、見せないようにすることはできる。お陰で色々助かっていた。コウヤは自分のことを、なるべくしてギルド職員になったのだと思っている。

しばらくするとその表示は消えた。光沢のあるカードは、鏡のように自分の顔も映し出す。幼く見えるその顔は、前世のものと同じではあるが、転生する数年前の幼い姿。

そして、肩口まで伸びた髪は少し紫がかった銀。瞳の色も薄いアメジスト色に変わっており、それが病弱であった頃の名残のようにひ弱に見せていた。

「【ステータス】」

そう口によれば、目の前に立体映像のようなパネルが出現する。これは、当人にしか見ることができない。表示されているのは、カードの情報より詳しく、世界が保有している正しい個人情報。

名前……コウヤ

年齢……12

種族……神族（未）

レベル……370

職業……聖魔神（半邪神）、ギルド職員（仮）

魔力属性……火10、風10、水10、土10、光10、闇10、聖10、邪10、空10、無10

スキル・称号……ゼストラーク神の加護、エリスリリア神の加護、リクトルス神の加護、技巧士、治癒士、武闘士、魔工士、神匠の直弟子、自己再生、武器絶対相性、隠蔽（極）、世界管理者権限（中）、神々の愛し子、可愛い末っ子、聖魔を併せ持つ者、邪神の生まれ変わり、無限の可能性を秘めし者

「あ、レベル上がった。キリがいいね」

色々であり得ない内容には目を向けない。一つ手を振ってそれを消すと何事もなかったように、地面に落ちていた汚れたペーパーナイフを拾い上げる。そして、取り出した布で汚れを拭き取った。

「これはもう使えないかな？」

脂や血が染み込んでしまったペーパーナイフは、もう紙も切れないかもしれないなどと、どうでもいいことを考えながら、改めてカメラの遺骸に向き合った。

コウヤは、前世では病弱な日本人の男の子として生きていた。ただし病弱だった原因は、その更に前の生による問題だ。

こちらの世界で神として生まれたコウヤは、魔法と聖魔を司っていた。聖魔とは、分かりやすいえば、善悪のことだ。世界の倫理観や秩序とも言えるかもしれない。

それを定め、人々に理解させていくのがコウヤの仕事だった。まだ新たに派生したばかりの世界であつたため、これは重要なことだった。これらのバランスを整えなくては生と死の価値さえ分からなくなる。

コウヤは度々人界に降り、世界に秩序をもたらしていった。だが、はみ出してしまふ者はいらる。その辺りの境界の設定は難しいものだ。

そして、未だ調整が必要な段階で、増え過ぎた人族達は、与えられた秩序の枠を窮屈だと感じ始めた。やがて、徒党を組む、コウヤを悪しき神だと認識していったのだ。

多くの人々の悪意がコウヤを苦しめ、狂気に落としてしまった。その結果邪神と呼ばれ、全ての人々がコウヤを倒そうと立ち向かって来た。これによつてコウヤは倒れ、ゼストラーク達の怒りに触れた人々は、その数を半分にまで減らされたという。

とはいえ、邪神という共通の敵が出来たお陰で、世界の秩序がこの時、安定したのも確かだった。

「元邪神って言われても、やっぱりまだはつきりと思ひ出せないな」

かつての記憶はとても曖昧だが、この世界に転生してから、ゼストラーク達のことを家族のように感じている。魂が覚えているのだ。

「魂の傷が癒えるまで世界をゆっくり見聞しろって言われても、難しいんだよね〜」

今、コウヤは完全な神族ではない。ステータスで表示される【未】は【未成熟】という意味。これによって、時折神界に行くことはできるが、ずっと滞在することができない。存在が安定していないからだ。

まずは弱ってしまった魂を回復させ、力を取り戻す必要があった。それでも、ゆっくりとだが、記憶は戻ってきている気がしている。

「実戦とか、まだ不安だし」

中途半端に思い出しかけている、神であった頃の記憶は、その頃の力と今の力の差を感じさせ、上手く調整できないのだ。

コウヤは決して自分が強いとは思っていない。もちろん実際は、冒険者達では敵わない相手不倒せるほどの隔絶した力を持っている。だが、コウヤの中には、前世の多くをベツドの上で過ごした感覚が未だに根強く残っており、自身ができることは他人もできると思いついていた。その上、神であった頃に容易くできていた記憶が混在しているのだ。

結果、日々戦いに身を置く冒険者になら、これくらいは問題なくできるだろうという勝手な思い込みが生まれた。これにより、『冒険者はすごい』『冒険者達は自分よりも強い』

と思いついてるのだ。

そんなコウヤが今回、こうして出てきてしまったのは、単にキレた勢いだけだった。

それはともあれ、ゼストラーク達としては、コウヤが世界を見て回ること、少しでもこの世界を好きになって欲しいと願っている。コウヤが冒険者になって旅することも推奨しているのだが、ギルド職員としての仕事が好きなコウヤには、冒険者になることは頭にならない。

彼は、倒したキメラに改めて目を向ける。

「人って案外、やればできるもんだなあ」

人じゃなくて神だけど、勢いってすごいと思うコウヤだ。目の前で死んでいるキメラは、倒せる力があるとしても、普段のコウヤなら全く相手にしようなんて考えない相手なのだから。

「さてと、キメラは食べられる所がないけど、素材としては使えるね。とりあえず血抜きしよ」

魔獣や魔物の『素材として使える部分』というのは、ギルド職員ならば一通り知っているべきことだ。仕事に誇りを持っているコウヤは、それらの知識も豊富だった。

コウヤが手を広げて前に突き出すと、空中に光で魔法陣が描かれた。キメラの血の出ている首元と腹にも、同じ紋様の魔法陣が出現する。すると、そこから血が吸い出され、目

の前の魔法陣の前に玉となって集まってくる。

「血も薬に使えるし、冷凍保存」

ある程度の大きさのキューブにして凍らせ、固めたら、それを亜空間へ収納する。亜空間とは、この次元とはズレた空間のこと。特別に魔法で作り上げた小さな世界だ。ただし、生き物が生きられる環境ではなく、無生物を保管するための倉庫のようなものだった。

一般的な魔法師では、これはできない。魔法を極め、理解し、更にはそれに見合った多大な魔力を扱えなくては発現することのできない特別な魔法だった。

「あとは……ん？」

一瞬、キメラの遺骸を見て違和感を覚えて、動きを止める。

「なんだろう？ まあ、いいか。後の作業は暇になったらやろう。このまま収納！」

何か気になったが、あまりゆっくりもしていられないと思い出す。亜空間に入れておけば、状態は永久に保たれる。臭いも漏れないし便利だ。

キメラの血で汚れた地を、他の魔獣が寄つてこないように魔法で浄化し、なかったものとする。そして、町に戻るべく歩き出した。

「あり、お腹空いた。朝ごはんまだだったっけ」

まさに、コウヤにとってキメラ退治は朝飯前となっていたのだ。



町に着いたのはそれから十分後。

空腹を感じてから、コウヤとしてはのんびりな速さで移動した。

キメラのいた場所は、町から直線距離で五キロほど離れているので、それだけで異常さが分かる。

コウヤの徒歩とは、飛んで跳ねて進むこと。本人としてはスキップだと認識していた。

だが、スキップでは通常一メートルも跳ばないし、平坦な地面ではなく、主に木の枝から枝に飛び移るので、普通ではない。意外と普通に走るよりも速いと思っている。

本人はいたって普通の散歩気分なのだが、町では浮かれた人と思われるわけにはいかなので、普段は気を付けていた。そのため、それが異常で、スキップではないことを指摘できる者は誰一人としていない。

「おはようございます。ご苦労様です」

町の外縁を守る、顔馴染みの門番に元氣良く挨拶をする。

「ん？ ああ、コウヤか。そういえば、休憩中に出て行くのを見たって他のやつが言ってたな。また仕事を押し付けられたのか？」

コウヤがギルド職員の制服を着ていることもあり、彼は数度の顔合わせですぐに覚えて

くれた気のいいお兄さんだ。因みに二十代独身。

丁度コウヤがギルドで働き始めた頃にこの町の兵士になった人で、よく気にかけてくれる。町ですれ違うとお菓子をくれるなど、弟のように思っていてくれるらしい。

コウヤが出て行く時は休憩中だったようで、違う人が眠そうに門に立っていた。彼は町であつたエリアハイヒールの騒ぎや、その時ギルドにいた冒険者達を全員転がした騒動には気付いてはいないのだろう。

何より、ここは西門。特に人通りの少ない門だ。この先には特に強い魔獣や魔物の棲む森があるだけの、未開の地の方角なのだから。

「今回は仕事じゃないよ。俺が自分でね」

「そうか？ コウヤはもうちよつと周りを頼るべきだぞ？ あんなギルド、早く辞めちまえよ」

この町の人々は冒険者ギルドに良いイメージを持っていない。普通に見ても、十二歳の子どもが一日中、休みもなく働いていればおかしいと思うのは当然だ。

「でも、お仕事なくなっちゃうし」

「いつも言ってるだろ？ お前は計算もできるし愛想も良いから、その辺の商家ですぐに雇ってもらえるさ」

「そうかなあ……」

自分に何が向いているかなど、コウヤにはいまいち分からない。何より、文句を言いながらも続けているのはそれなりに理由がある。

「でも、ギルド職員ってカッコイイし、毎日の仕事は楽しいんだよ？」

「……コウヤがいいならいいが……」

釈然としない表情を向けられながら、コウヤはカードを提示して町へと入った。

門番はコウヤの無邪気な様子のせいで、わざわざこの西門から出入りするという理由を特に気に留めなかった。

本来ならば、冒険者でもAランク以上のパーティーしか向かわない森のある方向だ。その森から出てきたところを見ていなかったため、他の人通りの多い門を避けてこっちに來たんだなというくらいにしか思わなかったようだ。

時折、この辺りの外壁沿いに出来る葉草を摘みに来るので、それだと思つたのだろう。不審に思われなくて良かった、とコウヤは胸を撫で下ろす。

「やつぱり似合わないのかな？ 最近、辞めろってよく言われるなあ」

制服も気に入っており、普通に仕事は楽しい。そうでなければ、時間外労働になっていることに気付かず、黙々と仕事をしたりはしない。確かに疲れや待遇の不満はあるが、仕事自体は好きなのだ。

実際、コウヤの仕事振りはすごい。同じ十二歳の子どもは当然だが、十年勤務した職員

も脱帽^{だつぼう}する働きぶりだ。ギルドマスターに褒められることがないので、自分ではすごいことだと認識^{しんしき}していないだけだった。

計算は速いし、人の顔と名前は一度で覚える。一度読んだ文書はページ数まで覚えてしまうし、効率重視で、空き時間が出来ないほど、仕事の優先順位も正しく埋める。ただし、どうでもいいと判断したことはすぐに忘れるし、自分のことは二の次、三の次と後退^{こうたい}していくので、それは問題だ。

この時、既に仕事のことが頭の大半^{たいてい}を占めており、空腹のことなど忘れているのが良い例だった。

「ま、いいか。とりあえず、これで治療祭りは終了するし、昨日の書類整理の続きだ！」
気合いを入れて、辿り着いたギルドに入ると、全ての視線がコウヤへと集まった。

「あれえ？」
その視線の種類は、いつもとは少々異質なものに感じられた。

「なんか、怖がられてる？」

一言で表すならば『不安』だろうか。

「コ、コウヤ……どこに……」

同僚である青年の職員が、恐る恐るといった様子で話し掛けてきた。そこで、そういえばと思いつく。

「あ、ペーパーナイフ！ あのまま借りてっちゃったんだ。ごめんなさい。汚れて使い物にならなくなったから、俺の使ってください」

コウヤが見事カメラを仕留めたペーパーナイフは、彼の物だった。といっても、ギルドの支給品だ。

早朝、いい加減治療のために呼び出されるのにうんざりしていたコウヤが、ある冒険者の傷を、明らかに喧嘩のものだろうと指摘したのが事のきっかけだった。『さっさと治せ』だの『ギルド職員なら俺らを優先して当然だ』などと言われ、面倒臭くなったコウヤは、ここで『エリアハイヒール』を使った。

そして、これで文句はないだろうと帰りにかけたところで『こんなことができるなら最初からやれ』とか『これからはこうしないと、教会に売り飛ばすぞ』と迫られ、キレたのだ。前世の見よう見まねで、いざという時のために練習していた柔道の技がここで咄嗟^{とつさ}に出た。最初に綺麗に決まったのは巴投げだ。

室内で魔法を使うと危ないし、剣なんて抜いたら他にも怪我人が出る。職員としての意識があったため、完全に肉弾戦だった。そうして、全員をもう一度怪我人にしたところで、元を絶とうと考えた。もうカメラを倒すことしか頭になかった。

そして、ここを出る時、辛うじて立ち上がった冒険者の一人が、咄嗟に机の上にあったペーパーナイフを投げつけてきたのだ。それをそのまま持つて行っただけだ。やは

り、日頃から使っているために、フィットして良かった。思わずそれを剣代わりに使ってしまうほどに。

ペーパーナイフの主である青年は、首を横に振る。

「そ、そうじゃなくて」

「ん？ 暴れたけど、ちゃんと椅子とか机とか備品は壊してないはずですよ？ 何か壊れてました？ それなら直しますよ？」

ギルド内にあるテーブルや椅子、壁などは、壊した者が弁償することになっている。普段から冒険者達によく喧嘩して色々壊すので、それらをギルドが対処しては予算が足りない。

これは冒険者ギルドのルールだ。踏み倒そうなんて考えてはいけない。その場合は、しっかりと取り立てている。そして、直せる物であれば直すのがコウヤの仕事の一つだった。

「いや。備品は大丈夫だ。その、怪我は……ないみたいだな。今、本部から査察が来ている」

「査察？」

そんな予定があったらどうかと脳内検索をかける。しかし、そんな予定は聞いていない。普段から上からの業務連絡はないが、査察が入って困るのはギルドマスターや上層部だ。

彼らの勝手な予定でないのは確かだった。

「あ、だから皆さん、静かにしてるんですね。良かった。暴れちゃったから、怖がられたのかと思いました」

「……」

ギルド職員が冒険者達に怯えられてしまつては、仕事がやり辛くなる。同僚達も怖がっているのではなく、その査察のせいで少し青い顔をしているのだと、コウヤは一人納得する。

「査察って、仕事しない方がいいんですかね？ でも、受付滞っちゃいますよね。それから、だから皆さんもまだお仕事行けてないんですね」

「お、おう……」

この時間ならば、冒険者達が一番仕事を始めるのに集まつてくる頃だ。だが、集まつてはいても、一向に受付が進まないで、出発できないでいるのだろうと予想した。

「このままだと困りませんか？ なんとか、受付だけでも回さないと。やつちゃダメなんですか？」

業務を完全に停止しなくてはならない査察なのかと同僚へ尋ねる。すると、奥から一人の見知らぬ職員がやってきた。

「受付などの表の業務はしてもらって構いませんよ」

同じギルドの制服。だが、襟元を見れば、それがギルドでも上の立場にある者だと分かる。本部のチーフクラスの職員だ。

「あ、ではすぐに受付業務を開始しますね!」

笑顔で応えて、コウヤは受付の窓口の一つに座った。

受付の担当の席に座った彼は至つていつも通りだ。

「さあ、どうぞ。今日はとっても良い天気ですよ。薬草採取にも、討伐にももってこいです!」

からりとした朝の空気の中を移動して来て、嫌なことは全て忘れてしまえたのだから保証する。

コウヤが笑顔を振り撒けば、どこか緊張した様子だった冒険者達の肩の力が抜けた。そして、いつものように依頼書片手に向かってくる。

「そ、そうだな。これを頼む」

「はい。これは追加報酬もありますので、多少多くなっても大丈夫ですよ。お気を付けて」

「おう、行ってくるぜ」

一人見送ると、次々に冒険者達がやって来る。冒険者達はコウヤが強いことを知っている。逆らつてはいけないレベルだということも。

知っている理由は、分かりやすい。ギルドの備品を壊した際、修理代を踏み倒していく冒険者達へきつちり取り立てに行くのがコウヤだからだ。

あとは喧嘩の仲裁や交渉事の助っ人など、荒事も笑顔で解決するのだから見た目に騙されてはいけない。生死の判断を誤らない冒険者だからこそ、コウヤの実力を本能で理解しているのだ。

今回、コウヤがキレて投げ飛ばした冒険者達は、他から流れてきた素行の悪い者達だったので、それを知らなかった。そんな彼らは実は今、ギルドの端と地下牢で震えている。査察官の指示によるものだが、コウヤはそれを知らない。

「東の街道からこちらの町に向かう途中に盗賊が出るそうなので、充分に気を付けてくださいね」

「マジか、他の道はないか?」

コウヤは日頃から多くの情報を収集している。その半分くらいはスキルの『世界管理者権限』によるもので、周囲約五十キロの情報がその場で収集できてしまう。

「急ぐんですか? お兄さん達のパーティなら実力的にも問題ないと思うんですけど」

「別口で届け物があつてな……」

コウヤは困惑する冒険者の顔を確認して、オリジナルで作成した地図を取り出した。それなら、こつちからこう行つてください。この道はインクベアが出るんですけど、お

兄さん達のパーティなら避けられますよね？」

インクベアは、緑色の熊だ。それほど凶暴ではないし、小さい。嫌がらせをするのが大好きな『悪戯好きなクマさん』で、泥や樹液などを手や足、体に付けて、近付いてきた人に塗りつけたり、投げつけたりするのだ。上手く逃げないと、物凄く汚れる。とはいえ、慣れた冒険者ならば、食べ物で気を引くなどして避けることは可能だ。

このパーティも、以前しつかりコツを掴んだと話していたので大丈夫だろう。

「なるほど。それなら行ける。サンキューな！」

「お気を付けて」

かなりの人が出て行った。コウヤは手が空いたところで受付を閉め、今度は依頼の整理にかかる。

依頼のオーダーボードには、様々な依頼が書かれた紙が貼り付けられている。一通り、撫でるように見つめると、今度は締め切り期限の近い依頼書を探し出す。

このギルドでは、病院のカルテ整理棚のように、依頼書の原紙を種類ごとにまとめ、壁に作られた棚に差し込んでいる。最初は穴を開けて紐で綴じる形で保管されていたため、見返したり、依頼が達成されたものをチェックしたりするのが大変だったのだ。そこを改善したのがコウヤだった。

お陰で格段に効率が良くなり、少人数でも何とか回せる状態になった。因みに、この棚

を作ったのもコウヤだ。

コウヤはひよいひよいとそこから目的のものを抜き出し、作業用の机に持ってくる、内容を確認していく。

「あ、これってやつちゃダメなやつかな？」

表の業務は良いと言われたのだが、これは違うかもしれない。どうしようかと近くにいた査察官に尋ねることにする。彼らは隠密スキルでも持っているのか、意識を向けるまでもとても気配が薄かった。

「あの、この作業なんですけど」

「っ、へ!？」

声を掛けると、査察官はあからさまに驚いた顔をした。同じようにコウヤの同僚も、それまで意識に引つからなかった査察官に気付いてびっくりと体を震わせる。

「わ、私に気付くなんて……い、いえ、ごめんなさいね。期限切れのチェックね。大丈夫よ。ただ、処理したものは別に分かるようにしておいてもらえる？」

同僚達が青い顔をしていたのはこのためだ。気配を消してギルド内に散らばっている査察官達は、まず見つけられない。本部の中でも特に隠密スキルの高い者達なのだ。見つけれられるのは、気配察知スキルが彼らの隠密スキルよりも高い場合と、レベルに格段に差がある場合のみ。

コウヤは両方だ。気配察知スキルは『世界管理者権限』に集約されており、レベルは、最上位の冒険者でもあり得ない300超え。よって、コウヤには本当に自然に、同僚達の邪魔にならないよう作業する査察官の姿が最初から見えていたのである。

「分かりました。なら、昨日までの完了記録の整理も大丈夫ですか？ そっちも除けておきます」

達成された依頼は、依頼人への報告書を作成しなくてはならない。採取などの場合は、どうやって、どこで受け渡しをするかでも違う。ギルドから連絡して取りに来てもらう場合と、直接届けるものがあり、その仕分けも仕事のひとつだ。

「え、ええ……大丈夫だけど……あなたが一人でやるの？」

その女性の査察官は、近くにいるコウヤの同僚二人へとチラチラと目を向ける。二人とも受付にいたので、この作業が今できるのはコウヤだけだ。

「俺が一番早いみたいで。昼までには終わらせないと、配達に間に合わないですし」

「そ、そう？ やっぱりおかしいわね……」

ボソリと呟いて思案顔をするその女性に、コウヤは首を傾げる。

「どうかしました？」

「っ、いいえ……仕事を続けてちょうだい」

「はい！」

元気良く返事をする、気合いが入る。

けれど、笑顔だったのはここまでだ。高い集中力を発揮したコウヤは、猛然と書類をチェックしていく。期限切れのものは、依頼人へ納期の延長をするかどうかという伺いと、追加報酬額の案や代替案などを記す。

それらを終わると、次に依頼が完了したもののチェックだ。配達に回すものと完了であるとの手紙を用意するものに分けて、完了通知届けを先に作成していく。それを持って配達部署へ向かった。

配達の方は、それなりに梱包も必要だ。集められた依頼品を整理し、一つずつ届け先を確認して割り振っていく。

そして、ここにも査察官がいた。

「あの、配達は行っても大丈夫ですか？」

「っ!? うおっ、びっくりしたあ。うん。一応、こっちで先に確認させてもらうけど」

「分かりました。なら、これ今日の配達分です。チェックお願いします」

「あ、ああ……昼過ぎまでに終わらせておくよ」

「ありがとうございます！」

なぜ自分に気付けたのだらうと査察官が首を捻る中、コウヤはこれならば今日の業務に問題なさそうだと安心して部署を出て行った。

表に戻ったコウヤは、そこで重要なことを思い出す。

「あつ、カメラのも下げなきゃ」

いそいそとオーダーボードに向かい、カメラ討伐の依頼書を回収する。それを見ていた冒険者の一人が声を掛けてきた。コウヤがギルドで働き始める前からの顔馴染みのおじさんだ。

「それ、どうすんだ？ ランク指定上げるのか？」

今でもパーティAランク指定。それ以上になるとこの町には受けられる者がいなくなる。その場合は、合同パーティでの依頼となるだろう。

因みに、ランクは地球でのアルファベットが使われており、順番あまり変わらない。

これは、神であつたコウヤだから知っていることだが、多くの世界がこれを採用している。順番は下からH、G、F、E、D、C、B、A。そして、その上に追加されて出来たのがSランク。これが最上ランクだ。

現在、現役^{げんえき}ソロでのSランクはいない。記録を確認しても、歴史上認定されたのは五人ほど。今の時代に生きている元Sランクは、冒険者ギルドの統括^{とうかつ}をしているはずだ。

六人までの冒険者で登録されるパーティのランクは、全員の能力を総合して付けられるため、ソロでAランクの者が半数以上を占めていれば、Sランク認定される。ただし、Aランクになれる者がそもそも少ないため、現在も活動中のSランクパーティは世界に十も

ないのが現状だ。

それなのにSランクパーティへの依頼に切り替えるのか、という問いにコウヤは首を振った。

「いえ、もう倒したので」

「……は？」

ギルド内の音が消えた。

「ちよつ、コ、コウヤ、今なんて？」

全員の視線が集まる。今日はよく注目されるなど呑気に思いながら、コウヤは笑顔で答えた。

「今朝、俺キレたじゃないですか。その勢いで倒してきちゃったんです。あの辺にカメラは一体だけだったんで、違う子じゃないと思うんですけど？」

「んん!？」

半数がよろめき、倒れた。残りは頭を振ってから遠い所を見ている。

「どうかしました？ あ、喉の調子が悪いなら風邪^{かぜ}の引き始めかもしれませんし、薬湯^{くすりゆ}を淹れまじょうか」

冒険者の体調を気にかけるのも仕事のうちだと思っっているコウヤは、おじさんが止めようとして手を伸ばすのにも気付かず、そのまま給湯室^{きゅうりゅうしつ}に駆け込み、すぐに薬湯を淹れて戻って

きた。

「はい、どうぞ」

「あ、ああ……ありがとう……落ち着いたよ……」

「良かったです。あっ」

「ど、どうした!？」

周りの冒険者達も、今度は何だと顔を上げる。

「朝ごはん食べてませんでした……お腹空いた」

「そ、そうか……丁度昼飯時だし、おいちゃんにご飯に行くか？」

「いいんですか？ 行きます！ 休憩お願いしま〜す！」

「……行つてらっしゃい」

いつもはコウヤが不在だと不安で^{しぶ}渋る同僚も、反射的に了解してくれた。査察官がいることで上層部も出てこないようだし、食事の途中で戻れとも言われないだろう。何より、気の良いこのおじさんならば、きつと追い返してくれる。

嬉しそうに、先ほど外したキメラの討伐依頼書を、受付の自身の席に置いてくるコウヤの後ろでは、その冒険者のおじさんと査察官が話していた。

「詳しく聞いてくるんで」

「お願いします」

「おう、コウヤ、行くぞ」

「は〜い！」

面倒見の良いおじさんについて、コウヤは様々な感情が籠^{こも}った視線に見送られながらギルドを出て行った。

立ち読みサンプル はここまで



ようやく食事でありつけたコウヤは、機嫌^{きげん}良く質問に耳^{みみ}傾^{かたむ}けていた。

「それで？ キメラをどうしたって？」

このおじさん、名をグラムという。おじさんと言つても、四十になつたばかり。コウヤには『おいちゃん』と言うが、他の人におじさん扱いされるのは許せないらしい。

これだけでももう、コウヤを特別に気にしているのが分かるだろう。この町の冒険者達^{そぞろ}は総じてこんな様子だ。ギルド職員としてのコウヤを信頼しているし、ちよつと働き過ぎなコウヤを気にしている。

実は今回、査察が入ったのも冒険者達の力によるものだった。

この町ユースルは国の一番端、^{へんぎょはく}辺境伯の治める大きな町だ。大きさは王都と商業都に次いでいて、辺境でありながら住みやすい町と評判だ。